

●伊蘇普物語

牧 羊 譯

其四 狼と鶴

或時狼が喉に骨をたてたもんだから、大變な
 お賃をあげるといふ約束で、一
 羽の鶴を雇うて来て、其長い嘴
 をつっこんで、骨を取り出して
 貰うことにしました、所が、鶴
 が、骨を抜き取ってしまつてか
 ら、「さーお約束のお賃は」といつ
 て請求しますと、狼は、さも悪
 くしく齒をむき出して「オヤ、何
 だと、馬鹿なことをいふ鶴だな、お前、狼の口と
 唇とから、自分の首を無難に引き出すことの出来



たのが、夫でも一大變なお賃になつてゐるじゃないか
 其上のお賃などは、あんまり虫がよすぎるぜ』

惡漢の爲に盡した時に、報酬を望むは愚なり、
 害を免れたならば、夫だけでありがたいと思へ。

其五 父と子ども

一人のお父さんが、幾人かの
 子供を持って居ましたが、常に
 喧嘩ばかりして、仕様があまりま
 せん。お父さんが、どの位骨を
 折つても其喧嘩が己みません所
 からして、何か宜いお手本で、
 兄弟喧嘩のよくないことを知ら
 せてやらうと考へまして、或日のこと、兄弟の子
 供等に、めい／＼一本づゝの杖を持って來させま

した。そこで、お父っあんは、其一本づゝの杖を一
束にして、渡して各自順番に、夫をへし折って見
よと命じますと、誰も彼れも、力一杯にやって見
たが、一人も之を折る者が無い。次に其束をとい
て、元の通り一本づゝにして、各自に渡して折ら
せて見ると、皆が苦もなく折って仕舞ひました。

そこで、お父っあんが申しますには『さー、みん
なよくおさゝなさい。お前方兄弟、皆心を一つに
してお互に助け合ふものなら、丁度此杖の束の様
に、敵から負けることはない、然し喧嘩をして、
互にバラ／＼になると、この杖の通り、譯もなく
折られて仕舞ふものだぞ』

其六 蝙蝠と蝮鼠

ある時蝙蝠が地面へ落つて、蝮鼠につかま
へられましたから、一生懸命に助けて呉れると願

ひますと、蝮鼠は一切鳥類とは敵同志だから、許
すことは出来ないといつて、どうしても聞きません
そこで蝙蝠は、決して鳥ではない、鼠の類だとい
つて、やゝと助けて貰ひました。夫から暫らくして
この蝙蝠が、二度目地面に落つて、今度は他の
蝮鼠に捕へられました。で、前と同じ様に、命を
助けてくれと願ひますと、其蝮鼠は、鼠とは特別
仲間が悪いから、助けてはやれないと申します。そ
こで蝙蝠は、決して鼠ではない、たゞ蝙蝠だとい
つて、二度目助かりました。

其七 鶏と寶石

一羽の雄鶏が、自分だの雌鶏の爲に、餌をあざ
つて居た所が、不圖、立派な寶石を發見しました

そこで、雄鶏が寶石に申しますには、『お前さんを拾ったのが、私でなくて、遺し主だったなら、夫こそすぐお前さんを拾ひ上げて、どれ程大事にするかも知れないに、不幸にして、私は お前さんを拾った所が、何も目的はない。夫よか、粟粒一粒でも見附けた方が餘程、私しの爲には宜かった。』

其八 燕と烏

燕と烏とが、どちが羽が美しいかといふので、喧嘩をして、果てもない。そこで、烏がとう／＼次の様にいつて、お仕舞にしました。『君の羽毛は、なる程美しいが、夫は春だけのことだ、而し僕のは冬になると、大變暖にしてくれるからな』

其九 獅子王

野山の獸どもが、獸界の王として獅子を戴くことになりましたが、此獅子はなる程王者の徳を具

備へて居つて、壓制だの殘酷などは少しもしませんでした。そこで、其獅子はだん／＼と政治を施いて居ましたが、或時其領分の烏や獸の大集會を開きまして、森の平和の爲に、鳥獸界の大同盟を作ることを宣告しました。此同盟では、狼も仔羊も、豹も仔山羊も、虎も鹿も、犬も兎も、一切協同の生活をして、永遠の平和を保つて行かねばならぬといふのであります。夫を聞いて、兎は手を拍つて喜びました。『オー これで、どんなに弱い者も、強い者の側に心配なしに、一所に居られるのだ、我輩は、どんなに永く、此同盟の出来るのを待つて居つたか知れない』

其十 主人と犬と

主人が今旅立に出やうとすると、門の前に犬が脚を踏んばつて立つて居るので『オヤ／＼ 此奴何

を欲しがって立って居るのか、も一すっかり用意が出来て居るに、貴様ばかりだ、さー、直ぐとお供をして来い』犬は尾を掉りながら答へました『なに、旦那様、私しは 疾っくの昔用意が出来てこゝで、旦那を待つて居る所なんですよ』

愚圖々々する人は、さまつて、自分よりも さつ
 さとする人の事を 愚圖だといひます。

親猫と隼鷹

やまとの翁

三年飼つてやつても、三日しか恩を覚えて居ないとか、飼つてやるなら年季を定めて飼つてやるとか、猫のことは頓と善くいふ人が少いですが、猫

だつて、どーして、中々可愛いものです。

先づ、猫か朋輩のカナリヤを助けたお話は、誰でも知つて居ませう。夫から猫が子供を可愛がる事といつたら、また中々甚いものです、

アメリカのある處に、一匹の牝猫が澤山な子猫を一所にして、日當りの直い椽側で、種々に戯けさせて遊ばせて居りました。大きな三毛の親猫が平たくなって、さも心地善さ相に、仰向けになって四足を伸ばして寝て居ると、可愛い可愛い子猫が二匹許り、チヨコ〜ッと驅けて来ては親猫の長い尾の尖をつかまへて、上になつたり下になつたりして喜んで居る、すると残りの二三匹が、また其子猫の足を噛えたり、両手でつかんで立ち上つて見では轉んだりして、何かなしに戯けて遊んで居ました。